

石油ランプ

飯能市立博物館 学芸職員 中村 岳



石油ランプ

現在、小学3年生の郷土学習に対応した「むかしのくらし」を開催中です。本展示では、およそ100年前の飯能市の民家の台所や囲炉裏端を再現し、昔懐かしい風景や道具を紹介しています。今月はそんな展示と連動して、あかりを灯す道具「石油ランプ」を取り上げます。

昔のあかりというとどんなものを思い浮かべるでしょうか。今回ご紹介する石油ランプが日本にやってきたのは、幕末～明治時代初期です。石油ランプは当時の日本で使用されていた行灯や和ろうそくの光に比べて、画期的に明るかったので、人々は感心し文明開化の象徴の一つとなりました。当初は高価な輸入品だったランプでしたが、多くの人が憧れ求めたことで、明治10年代半ばには国産で作られるようになります。写真の今回の展示資料は吊り下げ型ですが、日本の生活様式に合わせて台ランプや置きランプなどの改良版も登場しました。やがて明治時代後期にさらに便利な白熱電球が登場すると、徐々に置

き換えられ、大正時代には白熱電球が主流になっていきます。ただ置き換わりには地域によって差があり、昭和に入ってからも使用されていた地域もありました。

当館資料の石油ランプも日本に入ってきてからの改良版だと考えられ、アルミ製の反射笠が付いて、光が反射して下部に明かりが集まるようになっています。使い方としては、油壺に石油を入れて芯に火をつけ、調節ねじを回して芯の長さを調整します。芯が長くてもすすぐたくさんでてしまうし、短いと消えてしまうので絶妙なバランスが求められました。一方で石油ランプの使用には、油煙によるにおいやすといった苦労もありました。特に火屋は石油を燃やすことでガラスが黒く汚れ、明かりが遮断されてしまうので、毎日の掃除が昼間のうちの必須作業でした。これは多くの家で子どもの仕事だったようです。

文明開化の象徴として人々を夢中にさせた石油ランプ。人々のくらしとともに、新たな時代へと、世の中の雰囲気を明るく照らした一品です。

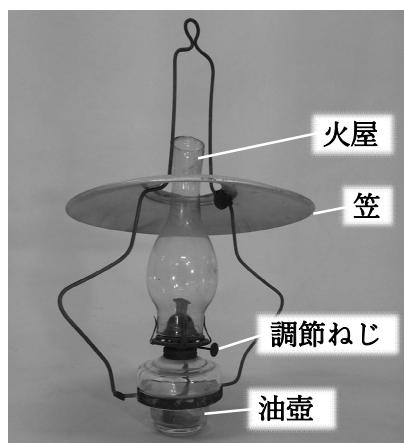
【参考文献】

福田アジオほか編『日本民俗大辞典（下）』（吉川弘文館、2000年）

小林克監修『昔のくらしの道具事典』（岩崎書店、2004年）

【お知らせ】

小学3年生社会科見学対応展示「むかしのくらし」1月6日（火曜日）から2月8日（日曜日）まで



各部の名称